

19. 肝胆道スキャンが診断に有用であった Biloma の 7 例

大谷 泰雄 田中 豊 後藤研一郎
津久井 優 三富 利夫 (東海大・二外)
鈴木 豊 (同・放)

肝・胆道外科術後の胆汁漏出は、大きな合併症の 1 つであり、腹腔内に胆汁が限局性に貯留した場合に、いわゆる “Biloma” となる。Biloma は、抗生素などの使用により腹腔内の感染巣として残り、弱毒菌感染のために、術後経過を不良とするもので、CT scan・Echo でも、しばしば診断困難で処置が遅れる場合があり、他の画像診断方法の活用が望まれている。

肝切除、肝のう胞の開窓術、PTCD、肝管空腸吻合、肝外傷の縫合止血などの術後に生じた Biloma 9 例に肝胆道スキャンを施行し 7 例を診断し得たので、Biloma における肝胆道スキャンの有用性について報告した。

肝胆道スキャンは、CT scan・腹部超音波検査で腸管との鑑別が困難な症例に、特に有効であった。なお、Biloma の診断には、Biloma への流入する胆汁量が少量であるため、通常よりも観察時間を延長した方が良い。

20. 小児骨シンチグラフィーの検討

山岸 嘉彦 奥山 厚 玉井 仁
山本 彰 赤石 健 鍛 喜美恵
高岩 成光 福永 淳 篠原 義智
疋田 史典 佐藤 雅史 渡部 英之
(日医大・放)

日本医科大学付属 4 病院放射線科において、1965 年 6 月 1 日から 1966 年 5 月 31 日までの 1 年間に施行されたシンチグラフィー数は、6,259 例であり、骨シンチグラフィーは、1,243 例であった。この中で小児の骨シンチグラフィーは 44 例であり、腎について、Ga とともに 2 番目であった。

小児骨シンチの目的あるいは適応につき、その頻度をしらべたところ、原発性骨腫瘍がもっとも多く 43.3% を占め、次いで炎症、痛み、軟部腫瘍、転移性骨腫瘍、骨折、無腐性骨壊死の順であった。

成人では、転移性骨腫瘍の評価が最も多いのに比べ、特徴的であった。各項目についての症例を供覧した。

21. 小児腎シンチグラフィーの検討

藤野 淡人 岩村 正嗣 須川 晋
池田 滋 石橋 晃 (北里大・泌)
中沢 圭治 依田 一重 石井 勝己
(同・放)

過去 14 年間に経験した小児の腎シンチグラフィ 315 症例について、統計的観察とともにその有用性について検討し、若干の興味ある症例を呈示した。

対象は過去 14 年間に腎シンチグラフィが施行された 15 歳以下の小児例、315 症例で、検査回数は総計 532 回であった。対象疾患としては尿路感染症が 68 例と最も多く、次いで、水腎症、血尿の精査、腎移植術後、などの順であった。検査回数は 1 人当たり、1~9 回、平均 1.7 回で、特に腎移植術後には平均 4.4 回の反復検査が施行されていた。最後に、本検査法の小児腎尿路系疾患の診断法における臨床的意義について、他の画像診断法との比較もまじえて検討した。

22. 神経芽細胞腫における I-131 MIBG の使用経験

中島光太郎 菅原 信二 石川 演美
秋貞 雅祥 (筑波大・臨床)
畠山 六郎 田村 正夫
(筑波大附属病院・放)

Guanethidine の類似物質として副腎髓質に親和性のある I-131 MIBG は、Neural crest 由来の腫瘍の局在診断に優れた薬剤として注目されている。

筑波大学附属病院では、昭和 59 年 11 月より 61 年 6 月にかけて 6 例の神経芽細胞腫に対して計 13 回のスキャンを行った。

スキャン像は、従来の 24~48 時間後のものより 48~96 時間後に撮像する方がよりよい像が得られた。

6 例の神経芽細胞腫のうち、治療前にスキャンの行われた 3 例では、原発巣、転移巣を全て描出することができた。治療終了後の経過観察として行われた 3 例では再発や転移を思わせる異常集積を認めなかつた。

また、骨髓浸潤のある 1 例では、骨髓への異常集積が明らかに認められ、治療経過とともに集積が低下していくのが観察できた。

今後の課題として、経過観察の指標として定量的評価

法を行っていくことが必要と思われる。さらに、いつも入手できる供給体制が確立されることが望まれる。

23. 悪性褐色細胞腫の1例— ^{131}I -MIBGイメージングおよび放射線治療—

杉山 純夫 岡崎 篤 勝俣 康史

野田 正信 前原 忠行

(関東通信病院・放)

広汎な転移巣を有する悪性褐色細胞腫の一例に対して、 ^{131}I -MIBGシンチグラフィを試みる機会を得たので各種画像と比較するとともに治療についても若干の文献的考察を加えた。

症例は57歳男性で、約6年前に右副腎腫瘍摘出術(組織・褐色細胞腫)を受けており、術前すでに肺転移巣がみられていた。Tegafur系の抗癌剤投与にもかかわらず、肝骨転移の出現がみられ、数回の入退院をくり返し、エンドキサン、ビンクリスチンも無効であった。 ^{131}I -MIBG投与後、24, 48, 72時間で撮像したがすでに24時間像で他の画像診断で認められる病巣に比較的良好な集積像を示しており、局在診断には有用な検査法と考えられた。なお本症例は肝、骨転移に対して40Gy以下の放射線治療で症状改善がみられており、Sissonらの報告のごとく ^{131}I -MIBG大量投与による治療の有用性が期待された。

24. 各種肺疾患における ^{67}Ga シンチグラフィと肺換気血流シンチグラフィの対比

井田 正博 松本 滋 守谷 悅男

森 豊 間島 寧興 川上 憲司

(慈恵医大・放)

島田 孝夫 伊藤 秀穂 (同・三内)

びまん性肺疾患27例について、その胸部X線写真および ^{67}Ga シンチグラフィの所見、肺換気(\dot{V})・血流(\dot{Q})シンチグラフィの所見を比較検討した。過敏性肺炎の1例では、胸部X線上所見を認めなかつたが、 ^{67}Ga の異常集積と換気・血流障害を認めた。特発性間質性肺炎では進行例で換気・血流障害を認めたが、初期例では換気・血流イメージは正常であった。珪肺症の2例では、 ^{67}Ga の異常集積をみるも、換気・血流障害はみられ

なかつた。 ^{67}Ga の集積と換気・血流障害の部位は必ずしも一致せず、 ^{67}Ga が比較的びまん性かつ均等であった例でも、換気血流障害は不均一に認められることが多く、局所的な病態を把握するのに両者の比較は有効であると考える。

25. 標識基剤を用いた坐剤の直腸内動態の解析

野口 雅裕 金子稟威雄 木暮 喬

(東邦大・放)

杉戸 慶子 緒方 宏泰

(明治薬大・薬剤学)

高野 政明 丸山 雄三

(東邦大大森病院・中放核)

佐々木康人

(群大・核)

ヒト直腸内における油脂性基剤 Witepsol H-5, W-35, S-55 の拡がりを、核医学的手法を用い検討した。H-5, W-35 は触媒を用い基剤に Tc を化学的にラベルし、S-55 については直接基剤と Tc との研和により基剤中に保持させる方法をとった。健常男子5名に直腸内投与を行い経時に4時間まで背面および左側面像を撮影し同時にコンピュータに収録し解析を行つた。坐剤基剤の拡がりは挿入部の4時間後の残存放射能が約45%を示し、各被験者における垂直方向への移動距離は5~11.5cmで平均約8cmであり、最終排便と投与時の間隔が長いものほど上昇距離が短く、投与直前に排便した症例で11.5cmと最大の上昇を示したことにより、直腸内糞便の残留が坐剤の拡がりに関係のあることが示唆された。今後測定対象を拡大し、投与条件・洗腸などの影響を考慮し、製剤設計および評価に応用してゆきたい。

26. 人工関節置換術後の有痛患者における ^{111}In 標識白血球シンチグラフィーの臨床検討

寺内 隆司 宇野 公一 湯山 琢夫

瀬戸 一彦 植松 貞夫 有水 昇

(千葉大・放)

勝呂 健 永瀬 譲史 武内 重則

井上 駿一 (同・整外)

人工関節置換術施行後に疼痛を訴える患者において、その原因が人工関節の loosening によるものか、感染に